

国際化推進室ニュースレター No5

—新着情報—

◆センター大学からの留学生がアメリカへ帰国しました

2007年10月から4ヶ月間、交換留学生として来学した5名の学生が無事に1月末に帰国しました。メッセージをいただいていますのでご紹介します。

チェイス・ウィルソン/Chase Wilson

(アメリカ センター大学3年生)

僕の専攻は化学ですが、日本語の勉強が好きなので、日本の言語と文化について習いに来ました。留学中はホームステイをし、たくさんの旅行をしました。また、日本人の友達もできました。冬休みには、留学仲間のドゥルー君と一緒に屋久島を旅行しました。雨が降っている中、8時間かけて縄文杉へ歩いて上りました。すごくきれいで、いっぱい自然が見えました。成人式には日本の着物で写真を撮りました。日本は素晴らしいと思います。日本に来て良かったです。



アンドルー キングソルバー

Andrew Kingsolver

(アメリカ センター大学4年生)

アメリカを出発する際、自分の家族や友達にいない4ヶ月間の困難を乗り越える覚悟で日本にやってきました。家族と離れて生活することは少し恐ろしくもあり、と同時にとてもワクワクするものでした。今、帰国するにあたり、4ヶ月間の生活を振り返ってみるとたくさんの困難なことがありましたが、決して一人ではありませんでした。センターから一緒に来た仲間たちとは、共に時間を過ごし、学び、学校生活を送る中でとても親くなりました。そして留学期間のなかで最も心に残ったことは、ホストファミリーの野村さん一家が私を温かく迎え入れてくださったおかげで、問題なく家族の一員になることができ、一緒に生活することが出来たことです。

今、アメリカ帰国前の一週間となりましたが、来日した当初ほどの帰国への不安はありません。なぜなら、山口で新しい友達と家族が出来たからです。帰国することは嬉しいことですが、山口で築いた友達や家族との素晴らしい関係や時間がとても恋しくなります。



サラ ハンプリー/Sarah Humphrey

(アメリカ センター大学3年生)

私が5歳の時、弟は早産による困難な状況を経験しました。そして、脳性小児麻痺で苦しむようになり、それ以来、私の生活は日常生活や脳機能に障害を抱えた人と直接的に関わるようになりました。日本に来るまでは、常に生活の中で彼の存在を感じていました。そして、日本で生活し始めると、弟や彼と同様の障害がある友だちが私の生活にいないのがいかに寂しいのかということに気がつきました。

このような形のホームシックに立ち向かうために、私は「わいわいクラブ」という場所で毎週水曜日の午後に知的障害や身体障害のある子どもたちのために開かれている放課後プログラムにボランティアとして参加し始めました。私の日本語が上手くないので、日本人チューターの1人が毎週同伴してくれました。私たちは最初の1時間半を子どもたちと遊び、その後の30分間は他のボランティアの方たちとその日のあったことについて話し合いました。「わいわいクラブ」を紹介して下さった社会福祉学部の藤田久美先生に感謝しています。

11月にボランティアを始めましたが、もう1月の月末になり、アメリカへの帰国時期が近づいてきました。わいわいクラブの子どもたちとボランティアの方たちとの3ヶ月間を振り返ると、心地よい感覚と素敵な出会いで満たされた時間でした。めったに外国人と交流する機会のない子どもたちと触れ合うことで、そのお返しに彼らは私の一時的な寂しさからくる心の痛みを慰めてくれ、私の気持ちをより何か大切なものへとそらしてくれました。子どもたちやボランティアの方たちとの時間を存分に楽しむことができました。また彼らに会えることを非常に楽しみにしています。

日本滞在中、弟に対する私の個人的な願望から始まったこのボランティアですが、アメリカ人の私の行動が地域社会の多種多様な人びとに手を差し伸べるようなモデルに少しでもなれたらと思います。“違い”—知的な違い、身体的な違い、または文化的な違い—は一見大きくもあり、支障になるかもしれませんが、現実には共に時間を共有し、互いに学びあうことで得られることに比べたら、ほんの些細なことであると思います。



◆韓国・中国からの交換留学生在がもうすぐ帰国します

2007年4月から1年間の交換留学生として、韓国(2名)と中国(2名)から4名の留学生在が本学にきています。3月末には帰国しますが、それまでにたくさん学び、思い出を作ってもらえたらと思います。留学生からのメッセージをいただきました。

カン ユンジョン/ 姜玗廷

(韓国 慶南大学校)

交換留学生としての日本での生活は本当に楽しかったです。思い出はたくさんありますが、その中でも去年の夏に行われたグローバル学生交流のことが一番記憶に残っています。私と金へナさんは韓国語の通訳のお手伝いとして3週間、プログラムに参加し、国際交流というのを実感することができました。また、大学祭で韓国のお菓子をを作って屋台を出したことなど、楽しい時間を過ごすことができました。山口の優しい人たちを絶対に忘れられないと思います。

キム ヘナ/金 ヘナ

(韓国 慶南大学校)

留学生活をしながら感じた山口県立大学はみんな優しく、留学生を理解してくれる温かいところでした。1年間の留学生活で1番思い出に残ることは、大学祭で店を出し、韓国のお菓子‘ホットク’を作ったことです。日本人の友達と一緒にホットクを作って売ったことが一番良かったです。山口県立大学のメンバーの1人として行事に参加し、直接関わることができ、学生の1人として認められたことが嬉しかったです。

コウ セイ/高 静

(中国 曲阜師範大学)

日本に来てから、自分の今までの世界がどんなに狭いものかが分かりました。先生方、また職員の方々のご指導のおかげで、私は日本のことをもっと知ることができるようになっただけでなく、物事を、国境を越えた広い視野で考えるようになり、日本で成人になる日を迎えました。この1年間、成長させていただきました山口県立大学の方々に、感謝の意が絶えません。本当にお世話になりました。

2008年1月に開催された山口県立大学国際文化学部主催の第4回マルチリンガルスピーチコンテストでは、最優秀賞をいただくことができたのが1番の思い出となりました。

私は日本でのことを一生忘れずに、これからも日本についての勉強を頑張ります。帰国後は中国から皆さんのお幸せをお祈りします。

シュウ ケイチン/周 桂珍

(中国 青島大学)

こんにちは！中国青島大学からきた交換留学生、周桂珍と申します。県立大学での留学生活があまりにも楽しくて、この一年間がいっそ

う短く感じています。帰国の時期が迫ってくるほど、寂しくてたまりません。大学で触れた多文化、実生活から得た感動や日本の知恵は、貴重な財産として、一生大事にしたいです。できれば、いままでお世話になった先生方や職員の方々、お友達、地域の家族、街で微笑んでくれた地域の方々など、皆にもう一度会って、「ありがとう」という気持ちを伝えたいです。決して「一期一会」ではありません、中国と日本は引越しのできない隣同士ですから、いつかまたどこかで会えると信じています！

日本では多くのチャレンジをしました。

2007年11月の国連協会スピーチコンテストで第1位を獲得した時には、武市先生や大学院の友人にも応援していただき、心強かったです。山口留学生会の企画した「リンゴ狩りツアー」では、山口大学の留学生も一緒に2台のバスに乗り、地元の方々と交流し、お世話になりました。中国に帰ったら、このような山口の人びとの温かい心を伝えていきたいと思います。

◆第3回 Y&I 交流会

1月21日(月)16時から学生委員会主催によるY&I交流会が行われました。“Y&I”にはyou(あなた)とI(わたし)の出会い(&)、そしてYamaguchi(山口)をInternational(国際的)な場所とつなげる場を設けるという2つの意味が込められています。今回は、留学生と日本人学生が国や学部を超えて、交流の場を持ち、それぞれの食文化を通じて互いの文化を知り合うために開かれました。「食事の場を設けることにより、雰囲気は堅苦しくならず交流を図ることができる」と学生部委員の金先生がおっしゃいました。

参加者は教員5名、元栄養学科出身で現在は学生支援グループに勤務されている職員2名、

日本人学生 20 名、韓国からの留学生 2 名、中国人留学生 4 名、青島大学からの留学生 1 名、そしてセンター大学からの留学生 5 名という多数の参加になりました。参加者は 6 つのグループに分かれ、それぞれの国でよく食べられている料理を日本人学生と協力して作りました。学生支援部副部長人見先生から出される調理のヒントがとても効果的でした。

各グループは料理中に会話を楽しみつつも手際よく調理していました。そして、お雑煮(日本)・マカロニチーズ・サラダとフルーツポンチ(アメリカ)・串焼き(韓国)・手巻き寿司と水餃子(中国)を作りました。

参加者のコメントとして、「各国の様々な方と交流ができ、同時に様々な料理を楽しむことができた」「自分の地域とは異なるお雑煮だったので、作るのが楽しかった」「留学生と共に作ることで会話も弾み、楽しかった」「日本では餃子を皮から作ることがないので、物珍しそうだった。友達と作って食べたのでいつもより美味しく感じた、また機会があればぜひ参加したい」「様々な言語が飛び交う中で調理し、みんなで食べるというのは本当に素晴らしい体験だった」、とコメントからも想像できるように食文化を通して、大変すばらしく盛大な交流会となりました。



◆センター大学留学生送別会が開かれました

1月21日(月)19時から北アメリカPT主催による、センター大学留学生送別会が行われました。学生の4ヶ月間の学習生活を締めくくる会で、特に4ヶ月お世話をしてくださったホストファミリーへの御礼の気持ちを込めた会です。ホストファミリーや県大生たちは、留学生との最後の時間を楽しみつつも、別れを惜しみました。シャルコフ先生による司会のもと、留学生5名は4ヶ月間の思い出とお世話になった先生方やホストファミリー、県大生に感謝の気持ちを日本語で発表しました。留学生にあらかじめにアンケートを取り、彼らの大好きな日本食・嫌いな日本食・日本で恋しくなるもの・日本滞在中の一番の思い出などを問題にし、ホストファミリーや日本人学生が5名の内の誰かをあてるクイズもありました。送別会の締めくくりとして、学生2名によるピアノ演奏があり、全員でkiroroの「ベストフレンド」を合唱しました。

留学生5名は充実した4ヶ月間を終え、それぞれが多くの思い出を抱えて、無事に帰国しました。

